

正倉院と皮革①

正倉院展は宝物拝観の絶好の機会

—正倉院はシルクロードの終着点—

学術博士・元(社)日本タンナーズ協会専務理事 出口 公 長

「調査委嘱」の幸運

正倉院の宝物は、わが国最古の皮革製品群も含め九千点とも万余ともいわれ、そのほんの一部が毎年秋に正倉院展として公開されており、私は毎年それを観賞し、楽しんでいる。そして、今回、ガラス越しでなくルーペで直に観察したり、顕微鏡写真に撮ったり、時には手を触れて感触を確かめるなど「宝物を調査」する機会に巡り合えるという幸運に遭遇することになった。兵庫農科大学（現：神戸大学農学部）で伝承皮革のことを知ってから、この宝物は「いつの日か直に見たい」という憧れの品であったので、「調査の委嘱」は私の生涯で忘れられない出来事となった。



写真 1

正倉院展：毎年秋に開催される。普段は目にすることのない、伝世の宝物を拝観する人々で賑わう。昨年は、17日間の会期中に23万人が訪れた。

私が公益法人の役員を退職したのは平成12年5月末日、それから一息ついた7月、宮内庁正倉院事務所の担当官から突然電話

を頂いた。「宝物の本格的な皮革材質調査を初めて行いたい、ぜひ協力願いたい」というものであった。後日、責任者ともども来宅され、指導機関や姫路革細工の工房とかの関係先の案内と意見交換もし、その後も種々協議を重ねて具体化していった。

調査団の顔ぶれ

宮内庁では、この宝物の皮革材質調査を、宝庫のご開封期間を利用して平成14年から16年にかけて3年間実施し、その報告書の原稿の作成には次の1年を掛けた。調査は、私を首席調査員とする4名の皮革専門家によって初めて行われた。下相談のあった時点では筆者なりにある程度の顔ぶれを想定したのであったが、当局の「少数精鋭でお願いする」との意向により私以外は次の方々になった。

竹之内一昭 農学博士 北海道大学農学
研究科畜産資源開発学講座助教授

奥村 章 大阪府立産業技術総合研究
所皮革試験所主任研究員

小澤 正実 選定保存技術保持者 東京
国立博物館内修理室文化財修理担当

調査の話に入る前にまず、正倉院の全般的なことについて触れておきたい。正倉院や宝物に関しては多くの参考書や資料・文献が出されているので、専門的なことについてはそれをご覧頂くことにして、私は一般的に見て面白そうなことに絞って少し紹

介しておきたいと思う。

正倉院の建物

「正倉院」(宝庫)というの、元は東大寺に属した正倉、すなわち東大寺が蔵した種々の財物や什器類を納めた蔵である。すなわち、かつての東大寺正倉院中に存在した多数の複合する倉のうち、奈良朝以来の長い変遷を経て、勅封と綱封の倉が遺ったものであると考えられている。南北に並んで一棟をなし東面して建ち、北倉、中倉、南倉の三つの倉からなる。檜材の高床式の倉庫建築で、正面約33メートル、側面約9.4メートル、高さ約14メートル、床下の高さ約2.7メートルという巨大な木造建築である。現在では宮内庁の所管となって、すべてが勅封とされている。



写真2

校倉：そばで見ると、その大きさと、古代人の息吹が実感される。礎石に置いたままの太い支柱に上部が乗っており、優れた免震構造になっている。

正倉院の宝物とその価値

正倉院宝物の淵源は、天平勝宝8年(七五六)5月2日に崩御された聖武天皇の遺品を、その七七忌(四九日の法事)である6月21日に光明皇后が東大寺盧舎那佛

(大仏)に献納されたことにはじまる。

もともとこの盧舎那佛は仏教に深く帰依された聖武天皇が発願・造立された佛である。天平17年(七四五)に着工され、天平勝宝4年(七五二)に開眼供養が行われた。皇后は天皇発願の盧舎那佛に遺品を奉獻することによって、その冥福を祈られたのである。このときの品々は献物帳の一つである「国家珍宝帳」や「種々薬帳」に記されている。その後も幾度となく献納されている。このほかに、「正倉院文書」と称される、奈良朝の古文書を始め、当時の貴重な寺院記録・経典も伝来している。

背景はアジアと欧州に広がる

特に強調しておきたいことは、正倉院宝物は当時の最高の技術を駆使して製作された品々であること、唐や新羅からの請来品も多いこと、その材料にははるか地中海地方や東南アジア産のものも含まれることなどであり、しかもこれらが人の手によって、各時代を通じて伝えられて来たこと、その多くが経歴の明らかな「伝世」の品であるということである。こうしたことを考えただけでも文化的な広がり・価値の大きさが推察される。正に宝物である。

また、校倉の建築様式自体も研究者の話によれば、その祖形は紀元前17、18世紀のカスピ海・黒海の母系社会にあり、スキタイに伝わり、その終点が中国の雲南であり日本であるという。雲南の校倉は2000年以上の昔からあるらしい。正倉院は使用材の年輪研究の結果、大仏開眼(天平勝宝4年:西暦752)以前に立てられたという。

正倉院の正倉だけが国宝

本来の校倉造の建物(正倉)は平成9年5月に国宝の指定を受け、翌年12月に東大寺などとあわせて世界文化遺産に登録され

た。しかし、最近の国宝指定に疑問を感じ
る方は多いと思う。というのは私自身も、
正倉も宝物もすべて国宝指定品だと思っ
ていたからである。正倉が国宝指定になっ
たのは、この地域一帯の建造物や景観を世界
文化遺産に登録するためには正倉も国宝の
指定を受けていないと申請できなかつたか
らである。だが、宝物類は皇室の財産とし
て「宝物」として管理され、国宝ではない。
貴重さからいえば国宝級以上の品物だが、
その特殊性により区別されている。そして
現在、正倉には宝物類は収納されず、宝物
をかつて収納していた大部分の櫃が置かれ
ているだけで、いわば空き家である。この
校倉において建物の機能に関する研究も積
み重ねられてきている。

校倉構造の空調説は誤り

正倉院の建物について中学生の頃、校倉
空調説を学んだように記憶している。とい
うのは、湿気のあるときは三角形の木が吸
湿して膨らみ、外気の進入を抑制する。乾
燥した時はその逆の作用があり、収納され
た宝物を千年以上にわたって良好な状態で
保管できたのはこのためであると。しかし、
この説は近年の研究により科学的根拠がな
いと断定されているのである。当局では単
なる話として従来の説を否定するべく啓蒙
に努めているそうだが、未だにこの空調説
は根強い人気があって、学校の現場では教
えられているのが実情という。

空調伝説の始まりは江戸後期

この空調伝説の始まりは土井弘『正倉院』
によれば、江戸時代後期の考古学者藤原貞
幹が著書『好古小録』の中で「校倉は烈日
にあたれども土蒸の気なく、又雨に逢ひて
湿気を含まず、故に其の蔵むる所のもの、
数百年を経るといへども魚食しみの憂なし。古

人の遠慮往々此の如し」とのべていること
にあるという。これがさらに紆余曲折があ
ったものの確固たる形を取り始めたのは、
昭和3年、伊藤忠太東大教授が「校木の
伸縮で呼吸し湿度を調節する、宝物の保
存に適している」と意見を披瀝、同5年に
岡野貞東大教授が「伸縮説」を雑誌で取り
上げた。建築学の両権威の発言は絶大で、
定説・常識になっていったという。現在で
は優れた保存能力を維持してきたのは、収
納容器となった古櫃こびと校倉の高床式による
と考えられている。

正倉はなぜ焦げ茶色か

檜材を用いた巨大な建造物だが、千年以
上の風雪に耐え、簡素ながらも荘重で重量
感あふれる今日の姿になっている。すべて
の木は焦げ茶色に変色している。遠目には、
あるいは曇りの日には黒っぽくさえ見える
ほどである。木を手で触れると、簡単に手
が汚れる。黒っぽい粉が付着する。すべて
の木材の表面が長年の間、直接間接に紫外
線を浴び続けており、その結果、有機物が
分解消失し炭素成分が残ったようになって
いる。つまり、表面が焼け焦げたのと同じ
現象にいたって炭化しているのである。こ
れが今の正倉の色の理由になっている。そ
して、その周りを取り囲む木々の深い緑と
静寂さが調和しあい、正倉院ならではの
独特の雰囲気漂わす一角になっている。

近代的な保存庫：西宝庫

宝物を火災や地震その他の災害から守
り、宝物の管理を適切に行うために近代的
な機能を備えた収蔵庫が建造された。昭和
28年に東宝庫、同37年に西宝庫が完成し、
大部分の宝物は西宝庫に収納されている。
そして宝物は一つ一つ紙等で包み、木箱に
格納して保存されている。現在、室温は自

然のままだが、湿度が60～65%に調節され、人の出入りは昼間の午前10時から12時、午後は1時から3時の間に限られている。しかも、雨天には宝庫の出入りは禁止されていることは言うまでもない。

保存・維持にあたって最も警戒されているのは湿度の変化と、過湿である。繊維、皮革、木質などは有機質であるから空気中の水分を吸ったり吐いたりしている。組織に取り入れた水分によってその有機質は伸縮を繰り返して宝物の痛みの原因になる。さらに、バクテリアが蔓延したらその被害は計り知れない。

これまでの皮革調査

ところで、今までに3回の皮革材質調査が行われている。その一つは、大賀一郎博士ら13名の調査員で行われた「昭和二十八・二十九・三十年代正倉院御物材質調査」で、その内の「動物質」の項において、皮革及び陸上哺乳動物毛として14品目を取り上げられている。

二つ目は、松田権六教授ら5名の調査員による「正倉院髹漆品調査報告（上）」（昭和33年3月）であり、漆皮箱を中心に行われた。皮革の箱は34例であった。

三つ目は、正倉院紀要第21号（平成11年3月）の「年次報告：調査」の漆皮箱である。

1、2回目ともいずれも著名な方々による調査ではあったが、皮革の専門家ではなく、比較的簡単な調査で終わっている。しかも、その頃は今から見ても約50年前のことであり、観察する機器の不十分さは推して知るべしであろう。

宝庫の出入りは日中の4時間だけ

調査の期間は、勅使による宝庫開封の時期に合わせて設定された。前述の通り、雨

天以外の日中の4時間（10～12時、13～15時）入館し、調査はこの西宝庫の入り口傍の広間で行われた。建物の入り口は二階にあり、まず外の階段を上がる。すぐに手を消毒液で清め、靴を脱いでガラス戸に入る。戸の開閉は短時間に行う。ここは広くて、板の間になっている。直ちにスリッパを履く。ここでは人の靴下が雑菌を持ち込む心配があるので、スリッパを履いたまま坐ったり移動したりする。そして、毎回紫外線で消毒された白衣を着る。息の湿気や唾がかからないようにマスクもする。

この板の間に、粉塵の出にくい生地の薄い布団のような広い敷物が敷いてあって、その上に大きいテーブルがある。4名の調査員が向かい合って座る。この卓上に、調査すべき宝物が桐箱台に入れられたまま職員の手で提示される。皮革類だけでなく植物質・動物質などの宝物は、1250年という長い歴史の間に何らかの損傷を受け、自然の老化もあって脆くなっている。

調査・観察は緊張の連続

調査員は肉眼観察のほか、拡大鏡や照明器具、実体顕微鏡などを駆使して宝物を調べていく。宝物のどこかを指し示すためには紙繕こよりを使う。紙繕りなら傷をつける心配がない。記録するのにシャープやボールペンは使わない。鉛筆に限られるのは、芯の折れや汚れの危険が少ないからである。宝物にどうしても手を触れざるをえない時には、手や指先をアルコール布で清めてからのことになる。みだりに手で触れるようなことはしない。こうした調査で顕微鏡写真の必要な部分はわれわれの判断で研究職員に依頼していく。写真は後日の受理になる。

非破壊調査の鉄則と細心の注意

こうして一点一点、慎重に接する。落とすとか、物が倒れてくるとか、揺れによる損傷を避けるとか、事故発生の危険が無いように扱う。これ以上傷めないで「現状のまま」で後世に伝えていく。今回の仕事も「非破壊調査」が基本であるから、調査技術の発揮には限界がある。仕方が無い。

平成14年の10月、初めてのこうした作業が一週間続いた。さすがに週末には緊張と責任の大きさから疲れが出た。しかし気分は、稀有な宝物類に接することができたという充実した興奮と感動に満ちていた。この満ちたりた期間を毎年秋、3回繰り返したのである。正直なところ、実は4年目も、追加確認のために特別に1日拝観させてもらった。報告書の原稿の執筆中、不安のあるものに関しては再度確認をしたく、無理をお願いしたのであった。判定に、より正確さを増すためであった。

品目数と調査の概要

どの宝物に、どのような動物の皮革が使われているかを知るのが目的であるが、前述の条件の下、肉眼とルーペ、実体顕微鏡による観察、及び顕微鏡写真約1000枚を判定の手段とし、調査員は各自の判断を提出

調査品目の内訳					
		北倉	中倉	南倉	合計
武具		1	36	-	37
箱類		14	32	10	56
楽器		1	-	8	9
伎楽		-	-	17	17
帯類		1	-	23	24
履物		-	-	22	22
刀剣		2	19	-	21
馬具関係		-	15	-	15
その他		1	9	11	21
合計		20	111	91	222

して代表者の筆者が総括した。現在判明している皮革を材料とする宝物222点（主な内訳は武具52、箱類40、楽器・伎楽29、帯類23、履物22、刀剣22、馬具16、その他）で、その内約70点を3年間で調査した。その内容は履物17、楽器・伎楽10、馬具12、武具10、革帯6、漆皮箱4、刀剣4、その他となっている。

判定の根拠と標準品

いろいろな方法で判断に資する材料を宝物の一点ごとに各自が記録用紙に書き込んでいく。私は直接皮質に関係のないようなことでも、気づいたことは出来るだけ書き込むようにした。その時には役に立たないようなことでも、あとで思わぬ役目を果たすこともある。観察というのはそのようなことだと考えている。また、動物皮の標本も自分なりに集めたりした。標本によって、改めて、動物の種類によってかくも皮膚の構造が違うものかと感心もした。古い皮革を判断するのに現在入手できる動物の標本でいいのかという疑問も当然起きる。

学者によってはその年代差に恐れをなして動物種の判断に慎重になりすぎ、結論が出せなかったことがある。例えば、旧知のI京大教授（当時）は、動物種の特徴が明瞭であるにもかかわらず、著名なT古墳出土の小さな皮革片の判定に躊躇され、その実証の皮革片だけでなく調査・考察をも無にされた例を知っている。私は今回、それほど気にしなかった。標本は十分、判定に役立ったし、問題を感じることはなかったのである。宝物の過ごしてきた歴史や環境について、筆者は可能な限り自由な発想を心がけて判断した積りである。返ってそれがよかったと考えている。